

山の神殺人

坂口安吾

青空文庫

十万円で息子を殺さす

——布教師ら三名逮捕——

【青森発】先月二十三日東北本線小湊、西平内間（青森県東津軽郡）線路わきに青森県上北郡天間林村天間館、無職坪得衛さん（四一）の死体が発見され、国警青森県本部と小湊地区署は他殺とみて捜査を進め、去る八日、主犯として青森県東津軽郡小湊町御嶽教師須藤正雄（二五）を検挙、さらに十八日朝被害者の実父である上北郡天間林村天間館、民生委員、農坪得三郎（六一）と得三郎を須藤に紹介した同、行商

坪勇太郎さん妻御嶽教信者しげ（五〇）を逮捕した。……

——（朝日新聞五月十九日夕刊）——

子を捨てたがる父

公安委員の山田平作は夜になるのを待つて町の警察へ出頭した。長男不二男がヤミであげられていたからである。

「ご苦労さまです」

署長が気の毒そうに彼を迎えた。不二男が警察の世話になるのは、これで五度目だ。公安委員という肩書の手前、平作は人の何倍も肩身のせまい思いをしなければならぬ。

平作は道々思い決して来たものだから、署長を見ると亢奮して云った。

「今度ばかりはつくづく考えました。御先祖様の位牌に対しても顔向けができませんから今度という今度は、思いきつて勘当、廃嫡いたそうと思いますが」

「そうですねア。お気持は推察できますが、警察の世話になるよ
うな人間には何よりあたたかい家庭が必要なんですな。ここで突
き放してしまうと益々悪い方へねじむけるばかりでして」

署長が云いにくそうに言いかけるのを、小野刑事がひきとつて、
「勘当なんてことをしたら、箸にも棒にもかからない悪党が一人
生れるばかりでさ」

いまいましそうに呟いた。父親の責任を忘れるな、と云わぬばかりの語気が感じられて、平作は思わず気色ばみ、

「警察のお力でドシヨウ骨を叩き直して貰うわけにいきませんか。親の手に負えないから、お願いするのだが」

「警察の手に負えなくとも、親の手には負えなくちやアならん理窟ですな。親の心掛けがそうだから子供がねじ曲がるのだね。公安委員ともあろう人が」

小野の語気が荒立つので、署長が制した。

「小野君は不二男君の事件を担当しているので、情がうつっているんですよ。商売熱心で、とかくムキになり易いのがこの人物の長所でもあり短所でもあり。不二男君も結婚に早いという年でも

ないのですから、よいオヨメサンでも見つけてあげると落ちつくかも知れませんか」

署長はおだやかにこうとりなした。知らない人がきくとただおだやかな言葉のようだが、知る人がきけばそれだけではない。なぜなら、平作の言葉の様子ではまるで二十前後の不良少年を勘当する話のようにうけとれるが、実は不二男は当年三十三にもなっている。

平作は今の女房に頭があがらないから、先妻の子の不二男にやさしい言葉をかけてやったこともない。不二男は少年時代からまるで作男のように扱われて育った。戦争がなければもつと早くグレてとつくに家出でもしていたらうに、いわば戦争に救われたと

でも云うべきか、勇躍出征した。兵隊、戦争の生活は彼にとって
はむしろはじめての青春時代であつたのである。

終戦後、グレはじめた。相変らず父の作男のような生活ながら、
ヤミをやり、ヤミの仲間と時にはよからぬカセギをもくろむよう
なこともあつて、警察沙汰になることが重なつたのである。

その度に被害を蒙るのは平作で、示談だと云つて金をとられ、
ヤミでは自分の作物を盗んで売られ、重ね重ねの損失の上に肩身
のせまい思いをしなければならぬ。けれども世間は平作に同情ど
ころか、

「ノータリンの作男でもタダで雇えやしまいし、一人前に成人し
た長男にヨメもとらせずタダを幸いコキ使うから、こうなるのさ」

と批評はつめたい。

平作はかねてこの世評に腹を立てているところへ、署長が不二男君にヨメを、と云ったものだから、面白くない。

「あんな奴のヨメになる女がいるものですかい。なりたいという女があれば、色キチガイさね」

腹立ちまぎれに、百年の仇敵を呪うようなことを呟いた。

と、そのとき平作は警察の奥から賑やかな音が起っているのに気がついた。

「ナム妙法蓮華経。ナム妙法蓮華経。ナム妙法蓮華経。ナム妙法
……」

まるで滝の音のようにキリもなく湧き起るお題目の声。女の声

だが、必死の気魄がみなぎっている。

「あれは何ですか。警察の中と違いますか」

署長は苦笑して、

「朝から夜中までですよ。ほれ、例の山の神の行者お加久ですよ」

「人殺しの……」

「イエ、人殺しの方は、どうやらお加久に罪はなさそうです。あんまりうるさいから、今日にも釈放のつもりですが」

数日前に、農家の甚兵衛方で娘殺し事件が起った。キ印の娘ヤス子（当年十八歳）を一室に監禁し、食事を与えずチヨウチャクして死に至らしめたという事件である。一家の者が心を合せて謀殺の疑いがあったが、これに山の神の行者お加久が一枚加わって

いる。ヤス子に憑いている狐を落してやると云つて、十日間も泊りこんで祈つた。ヤス子に食事を与えなかつたのも、後手にいましてチヨウチヤクしたのも、狐を落すためというお加久の指さしが金ねだったという町の噂であつた。

「ところが取り調べてみると、どうやら、そうじゃないんですよ。お加久の所業と見せかけて罪をまぬがれようという甚兵衛一家の深い企みがあるのです。お加久は体よく利用されたにすぎないですよ。どうも、邪教を利用して殺人罪をまぬがれようという奴がいるのですから、正氣の人間はとにかく役者がさすがに一枚上ですよ」

署長はイマイマしげに説明した。すると小野がふと気がついた

らしい様子で、

「不二男の奴、山の神の信者になつたらしい様子ですぜ。また、お加久の奴が、どういうものか、不二男に目をつけたんですね。不二男に死神がついてると云うんです。それを払ってやるというんですな。昨日まではそうだったんだが、今朝方から、不二男の奴、合掌して、お加久に合わせてお題目を呟いてる始末ですよ」

それをきくと平作の目の色が変わった。

「すると、お加久にたのむと、不二男の性根を叩き直してもらえますすかな」

「神様のことは警察には分りませんや」

「ひとつ、お加久に会わせていただけませんか。もしも不二男

の性根が直るものなら」

「ハツハツハ。会わせてあげないことありませんが、それ、そのベンチに腰かけて合掌してる怪人物をござんなさい。兵頭清という二十五の若者ですが、お加久の大の信者でしてな。教祖の身を案じてあのベンチに坐りこみです。性根が直つてあんな風になるのも、困りものかも知れませぬぜ」

普通に背広をきて、一見若い事務員風の男。それがジイツと合掌している。青白い病的な若者じゃなくて、運動選手のような逞しき。それがジイツと合掌しているから、かえつて妖気がただよっている。平作はつぶさにそれを観察したのち、

「イヤ、あの方が何より無難です。ぜひお加久に会わせていただ

きたい」

そのあげく、お加久が不二男の性根を叩き直してくれることになり、お加久は兵頭清とともに当分平作の家に泊りこんでお祈りをする事になった。そこで不二男とお加久はその晩同時に釈放となり、これに兵頭清を加えた三名が平作にひきつれられて警察を出た。

ところがそれから三十分後に、濡れ鼠の平作がただ一人蒼い顔で警察へ駆けこんだ。

神様をだます人々

平作の語るところによると、こうである。

その日は暮れ方から降りだした雨が、平作の立ち去るころにはドシヤ降りになっていた。平作の家は町からかなり離れていて、小さいながらも一山越えなければならぬ。

平作はチョウチンを持ち先頭に立つて山径を歩いた。どうにも一列でしか通れない道だ。ドシヤ降りではあるし、お加久はお題目を声はりあげて唱えつつづけているので、ほかの物音はきこえない。平作は滑る山径を歩くだけが精一パイであったが、ようやく登りつめたところでふと振向いてみると、後にしたがつてるのはお加久と兵頭だけで、不二男の姿が見当らない。

「オレのすぐ後が不二男の順であったが、まさか突然姿が掻き消

えたわけではあるまい」

「坂の途中で小便の様子だから通り越して来たんですよ」

「バカヤロー。不二男の策にはまってズラカられたのだ。それで死神を落してやるの、性根を叩き直してやるのと、気のきいたことができるものか。もうキサマらに用はないから、とつとどこへでも消えてなくなれ。不二男の奴、もう、カンベンならねえ。」

警察で勘当の話をつけてもらう」

平作はジダンダふんで警察へ戻ってきたのである。

話をきいて、小野刑事はフツとタバコの煙をふいて、

「お題目の様子が神妙すぎると思ったら、やっぱりね。邪教が人をだますというが、この町の連中は邪教をだますのが流行だね。」

お加久はだませても、オレの目はだませないぞ。不二男の行き先ぐらいは、考えるヒマもいらなさい。一しよに來なさい。つかまえてあげる」

小野は立ち上ると、いきなり外出の支度をはじめた。

小野は平作をうながして、ドシヤ降りの中へとびだした。裏通りから露地へまがる。

「シツ。静かに」小野は平作を制しておいて、小さな家の戸口の方へ進んだが、にわか立ち止った。

「アツ。誰か、人が」

平作にはそんな気配は分らなかつた。

「え？ どこに？ 誰もいないようだが」

「イヤ。たしかに誰かがあツちへ逃げたような気がするが。……
こうドシヤ降りじやア、どうも、仕方がない」

小野はあきらめて、小さな家の戸口に立った。表戸をドンドンと叩いて、

「今晚は。大月さん。今晚は」

二十回も戸を叩いたと思うころ、ようやく屋内で人の気配がうごいた。

「夜中に、なアに？ 女の一人住いに」

「まだ夜中じゃないよ。九時に二十分前だ。これから三時間もたつと、そろそろ夜中だが」

「誰だい？ 酔ッ払いだね」

「警察の者だ。ちよつと訊きたいことがある」

「警察？　フン、誰だい、酔ッ払つて」

「戸を開けろ。山田不二男のことで訊きたいことがある」

にわかには小野が大音声でキツパリ云うと、屋内の女はあわてた。戸があいた。

「なんだい。小野さんか。なんの用さ？」

三十三四の女。後家のヒサというカツギ屋である。ちよつと渋皮のむけた女。なにかと噂のたえない人物である。

「不二男が来てるだろう」

「来てませんよ」

「フン。誰とねてた？　奥の男は誰だい？」

「誰も来てやしないよ」

「ほんとか。上ツて見るぞ」

「ええ、どうぞ。あんまり人を侮辱しないで下さいよ。近所隣りがあることだから」

「御近所は、もう慣れツこだ」小野はいきなりズカズカ上りこんだ。ガラリとフスマをあけると、奥は一部屋しかないから逃げ場もない。フトンの中の男がもつくり起き上つて、観念の様子。

「ヤ。鈴木か。鈴木小助クン、意外な対面。カカアに云いつけてやるぞ」

小野は小助を見下してニヤリと笑つた。この町のカツギ屋の大將格のオヤジである。

「悪いことをした覚えはないよ。とつとつ行つとくれ」

「ウン。よいことをしたただけだな」

小野は皮肉を浴せたが、諦めて靴をはいた。

「一ツだけ教えてくれ。さつき不二男がここへ来たろう」

「誰も来やしないツたら」

「誰もじゃない。不二男だ。二三分前に表の戸を叩いたはずだ」

「知らないよ。グツスリねてたから」

小野はドシヤ降りの表へでた。うしろで戸がピシヤリとしまつて、カギをかける音がしている。

「さつき、逃げたのが、不二男さ。奴サン、せつかく恋しい女のところへ駈けつけたのに、先客アリでしめだされ、そつと中をう

かがつていたらしいや。このドシヤ降りにご苦労な話さね。カツギ屋の後家なんぞ張るもんじやないよ。カゼをひくだけだ」

不二男に女がいるという噂をきいていた平作は、さてはそれがあの女かと思つた。

「あの女は後家ですかい？」

「後家のヒサさ。村一番の働き者で、イタズラ女さ。何人男がいるか分りやしない。いまに血の雨が降らなきやいいが、不二男なんぞも、気をつけないと……」

本通りで、平作は小野に別れた。いまに血の雨が降らなきやいいが……小野の一言が彼の頭にしみついている。

「悪い女にかかりあつていやがる」

不二男のおかげで、わが家がメチャ／＼になるような気がした。終戦後、二町歩の田畑を五町歩にふやし、山林も買いつけ、町では押しも押されもしない歴とした旦那の一人となり、公安委員にもなったのに、不二男のおかげで、とかく人々の尊敬がうすい。

「せっかくオレがこれほどの身代を築きあげたのに、あの野郎がいるばかりに……」

平作のハラワタは煮えるようだ。彼の望みは大きい。彼の眼中に新しい農地法などはない。彼の頭にしみついているのは、昔からの農村伝説だ。

太陽がこっちの山からでてあっちの山へ沈むまでの土地をそっくり我が物とし、鶏がトキをつくるたびに黄金が一升ずつふえて

いくような分限者になりたいのだ。そして人々に百姓の王様と仰がれ、彼が野良を歩くと、案山子以外の全ての人間が泥の中へうずくまって土下座する。見渡す全てのミノリも、全ての山々の緑も、彼自身のものである。

「オレがママにならないのは太陽だけだ。人間のウジムシどもなぞが、オレにオソレ多くも話しかけることもできないようにならなくちやア……」

夢のようなことを考える。ふと我にかえると、夢を裏切る現実
に、まず何よりもハラワタが煮えたつのは不二男のことなのであ
る。

術にかかると神様

平作がドシャ降りの中を疲れきってわが家へ戻ると、わが家の土間では大騒動がもちあがっている。土間にお加久と兵頭ががんばっていて、入れろ入れないで女房お常と争っているのである。

お常は平作を見るより駈けよって、

「どうしたのさ。いつまでも、どこをうろついてきたのさ」

「不二男の姿をさがしていたのだが」

「不二男ならとつくに戻ってきて、ねちまったよ」

「そうか。一足先に帰りやがったか」

「この人たちを、どうするツモリなんだよう。不二男についてる

死霊とかメス狐とかを落すんだって？ お前さんが頼んだツてのは本当なのかね」

「イヤ、一度はたのんだが、あとで断わつたのだ。しかし、まあ、このドシヤ降りに突き放すのも気の毒だから、今夜だけは馬小屋へ泊めてやろう。お前ら、表へでろ。ウチへ上りこもうなんて、ふとい奴らだ。お情けに今夜だけは馬小屋へ泊めてやるから、ワラをかぶって寝てろ」

平作はお加久と兵頭を馬小屋へ連れこんだ。

もともと平作がなぜお加久をわが家へ連れこむ気持になつたかという、不二男の性根を直そうという考えじゃなくて、甚兵衛のウチで起つた事件にヒントを得たせいなのである。

不二男がお加久の信者になったときいて、こいつはシメタと考えた。

平作は新興宗教なぞに特に関心はもたないから、教祖だの行者なぞというものを、ただの人間、むしろウジムシと考えている。

易者はお客を妄者とよぶそうだが、その易者も自身の未来が占えずシガない暮しを立てているところは、妄者以下、ウジムシじゃない。ウジムシの神通力なぞバカバカしくて考えることもできない。

けれども世間にはウジムシ以下のバカが存在することも確かだ、たとえばウジムシの信者になるバカがいる。こういうバカに対して、ウジムシが一応の神通力があるのも確かである。

「信者は教祖の意のままになるものだ。お加久に鼻グスリをかかせ、不二男を思うようにあやつらせて、できることなら一思いに……」

甚兵衛は自分たちも手を下したからロケンしたが、万事神サマの神通力にまかせてしまえばロケンする筈がないと考えた。

こう考えてお加久をわが家へ招く気持になったのであるが、不二男の信心が警察をあざむく手段で、帰宅の途中まんまと平作もだしぬかれてズラかられてしまったから、平作は怒り心頭に発してお加久を咒ったのである。

けれども、また平作の心が変った。不二男にああいいう悪い女や仲間がいては、いよいよ早々と不二男を片づけてしまう必要があ

る。平作の頭には小野の言葉がしみついていた。

「いまに血の雨が降らねばよいが……」

あの疑り深い刑事でも、ヒサのことでは血の雨が降りそうだと考えているのである。

「こいつは、利用できるぞ。ヒサのことで不二男が殺されたと見せかけさえすれば……」

新しい考えが平作の頭にうかんだのである。

平作はお加久と兵頭を馬小屋へ連れこんでワラの上へ坐らせた。平作はチョウチンをマンナカに立てて、二人をジツと見つめて、

「お加久はさすがに相当な行者と見えて、不二男についた死神とメス狐が見えるらしいな」

「見えるとも。憑かれた人間には影がたちこめているものだ。狐の鳴く声もきこえる」

「なんだ。影や声しか見たり聞いたりできないのか。オレには不二男についてる死神もメスの狐もハッキリ姿が見える。死神もメスの狐も不二男の背にしがみついて、両手を首にまき両足を腰にからみつけて藤のツルのようにシツカリしがみついている。死神の奴が右肩から、メス狐の奴が左肩から、不二男の顔をマンナカにまるで顔だけ三ツある化け物のようだが、身体は一つで、何百年も年を経た藤ツルのようによくこんで一体となり、とても放す見込みがない」

「イエ、オレが法力で落してみせる」

「キサマ、影ぐらいしか見えなくせに、大きなことを云うな。

オレにはチャンと見えているのだが、それでもどうすることもできないのだぞ。こう執念深くガツチりくいこんでしまつては、もう普通では落すことができないものだ。ヤ。待て、待て」

平作は袖でチヨウチンの火を隠すようにしながら、ジイツと聞き耳をたてていたが、

「フン。どうやら、ソラ耳であつたらしい。死神や狐は疑り深いから、近所で相談していると、すぐカンづいて、足しのばせて立ち聞きにくるのだ。大声をたてると悟られるから、お前らモツと前の方へ寄つてこい。チヨウチンの火があるとグアイが悪いから、火を消すが、お前ら片手をだせ。めいめいの片手を握りあつて、

心を合せて相談しよう。こうしないと、死神や狐が間へはさまつて立ち聞きされてしまう。いいか」平作は左手でお加久の片手をとつて、右手で兵頭の片手をとつた。

「お前らもめいめいの手をシツカリ握り合うのだ。まちがつて死神や狐の手をつかまされないように、チョウチンの火のあるうちによゝく改めて確めるがよい。火が消えてからは、どんなことがあつても手をはなしたり、握り変えたりしてはならぬ。ちよつとでも力をゆるめると、死神や狐の手にすりかえられてしまうからいいか。シツカリ握つたな。それではチョウチンの火を消すぞ」

平作は顔を押し当ててするようにしてチョウチンの火を吹き消した。にわかには馬小屋はくらやみとなり、ローソクのシンに残つた小さ

な赤い一点だけがチヨロ／＼している。

「さて、これでよい。それでは云うが、死神と狐の両手両足は不二男の首と腰に肉の中までくいこんでいるから、放すこともできないし、死神と狐だけ殺すということもできない。三位一体のようなものだ。不二男を助けるために、不二男の身体だけそのままにしておいて助けるというのが無理なのだ。心臓も首もそっくり重なって一ツになって息をしているのだから、どうしても一度は不二男の息をとめないで死神も狐も落すことができない。不二男の背から心臓のところをグツサリ突き刺す。短刀の刃先が心臓を突きぬいて向う側へとびでるまで突き刺さなければならぬ。こうして横に倒してから、次には不二男の首を斬り落す。一分でも

皮がついてるようではいけない。スツパリと斬り落して胴体と首をバラバラにしなければならぬ。そうすると、死神と狐の首が落ちるのだ。こうすれば死神と狐を落すことができる。こうしなければ、ほかに落す方法はないのだ。どうだ。お前らにはそれが分らないか」

お加久が歯をガタガタふるわせながら、

「そうだ。そうだ。その通りだ。そうすれば死神と狐を落すことができる。どうしても、そうしなければ落すことができない。三ツ重ねておいて心臓をブツスリ刃の根本まで突き刺す。三ツの首を重ねておいて一ツに斬り落す。こうしなければならぬ。こうすれば必ず死神も狐も落ちるぞよ」

「そうだ。しかしな。人に見られると、どうにもならぬ。不二男を山におびきだして、誰も見ている人のない山奥でやらなければならぬ」

「そうだとも。オレは山の神の行者だから、山の神のお膝元へおびきよせてやらなければならぬぞ。日光の奥山がよい。日光へおびきよせてやらなければならぬぞ」

「そうだ。日光の男体山の奥山でやらなければならぬ。中宮祠の裏のずつと奥の沢へでて藪の中でやらねばならぬ。それをやるのは兵頭の役だが、兵頭はやることができるか」

「そうだ。そうだ。それをやるのは清の役だ。清はきつとやるこ
とができる。うしろから心臓をブツスリ突き刺して、首を斬り落

すのだ。きつとやることができるぞよ」

兵頭も寒気と亢奮とで石のように堅くなつてブルブルふるえていたが、こう云われると膝からガクガクとゆれはじめて、カチカチと時計のように歯を鳴らしながら、

「ハイ、オレが必ずやってみせます。オレも昔のオレではない。いまでは、神様を見ることも、声をきくこともできるようになりました。もう一とふんばりで、立派な行者になつてみせます。不二男の死神と狐はオレがスツパリ落してみせます」

それをきくと平作はカーパイ二人の手を握りしめて波のように揺さぶりながら、

「ナム妙法蓮華経。ナム妙法蓮華経」

お題目を唱えはじめた。二人の狂信者がそれにつれて、ここをセンドと合唱しはじめたことは云うまでもない。

王様誕生

それから十日ほど後のことである。日光男体山の山中で心臓を刺され、首を斬り落されて死んでいる男が発見された。

一定の日でないと行者が通ることもない山だが、その日に限つて里人がそこを通つたので、兇行の翌日に死体が発見された。これも一ツの幸運。

殺された男の懐中から一通の手紙がでてきたので、被害者の身

許も分つた。重ね重ねの幸運だ。被害者は云うまでもなく不二男。隣の県の間人だ。この手紙が現れなければ、事件は永遠に解決されなかったであろう。

手紙はヒサからのもので、日光で待っているから来てほしい。迎えの人を馬返しにだしておくから、その人の案内通りに安心してついてきて欲しい。日光の山中でつもる話をして縁を結びたい、という味なことが書いてあった。

「すると、情痴の殺人か。それにしては、わざわざ首を斬り落すほどテイネイなことをしながら、懷中を改めないとはマヌケの犯人がいるものだ。常識では考えられないようなマヌケだね」

ところが日光からのレンラクで、小野刑事がヒサを取り押え、

取り調べてみると、ヒサは当日他の場所にいたことが、多くの人々の証言もあつてハッキリ分つたのである。

ヒサはそんな手紙は書いた覚えがないと云つた。

「チヨイト、旦那。この手紙は男の手だね。女の手に似せるために、わざとヘナチヨコに曲げて書いたのよ。私はね。カツギ屋渡世はしてますけどさ。これで書は小学校の時から然るべき先生について、書道の奥儀をきわめているんですからね。スズリと筆をかしてごらん。水茎の跡を見せてあげるから」

書かせてみると、なるほど達筆、どこの姫君が書いたかと思うような能筆である。捜査はやり直しということになったが、被害者の身許は判明したし、証拠の手紙があるから、犯人の所在はき

わめて限定されている。ヒサをめぐる男を洗って行けばよい。ところが、ヒサの情夫をしらべてみると、みんなアリバイがある。みんなカツギ屋のことだから、それぞれ当日の所在にはハッキリした証人があげられるのである。

小野刑事は考えた。

「そうだ。男を迎えにだすと書いてある。情夫が迎えにでるわけではないから、迎えにでた男というのは情夫のうちの誰でもない別の人間でなければならぬ」

駅へ行つて調べてみると、その前日日光行きの特等切符を買つて翌日戻つてきた人間の居ることが分つた。これが兵頭清である。

「そうだ。兵頭なら警察で不二男に対面しているから迎えの使者

の役目が果せるわけだ。使者は兵頭ときまつたぞ」

小野はコオドリして、兵頭の行方をさがして、平作の馬小屋でお加久と共に祈りをあげているところを捕えたのである。

兵頭が白状したので事件は解決した。このお礼に、平作は十万円を投げだして、お加久のためにお堂を立てることになっていたのである。

平作は捕えられたが、黙秘権を行使して一言も物を云わない。たぶん彼はこの世で実現できなかった夢を牢屋の中へ持ちこんでいるのだろう。むしろ牢屋の中の方が、彼の夢は実現し易いのかも知れない。

「オレは王様だ。王様を牢にとじこめるとは何事だ」

彼は時々格子にしがみついで、歯ぎしりして叫んでいるそうである。

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 14」筑摩書房

1999（平成11）年6月20日初版第1刷発行

底本の親本：「講談倶楽部 第五卷第一〇号」

1953（昭和28）年8月1日発行

初出：「講談倶楽部 第五卷第一〇号」

1953（昭和28）年8月1日発行

入力：tatsuki

校正：藤原朔也

2008年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山の神殺人

坂口安吾

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>